



東海村の今と昔の姿を写した写真展の開催(8月30日(日)まで村立図書館、9月13日(日)～26日(土)はステーションギャラリー(JR東海駅駅舎2階)で開催)に伴い、その懐かしい写真をちょっとだけご紹介します(最終回)!

原研立地のころ

日本の原子力研究が進められている東海村とはいったいどのような所かを特集した当時の雑誌(「週刊朝日」の「新日本拝見 東海村」昭和32年5月12日号)の一ページ。阿漕ヶ浦倶楽部や村松小、村松村役場、それに建設が始まったばかりの原研建屋が見える。ほかのページには、好奇の目で原研の建設工事を見守る村民たちの姿も紹介されている。しかし昭和32年当時のこの写真には、日本原子力発電株式会社もNTTも、そして国道245号も未だない。

ふるさと歴訪
〜自然を探して〜

幻か? ナミハンミョウ

誰が見ても美しい虫として選ばれる常連のナミハンミョウは、「斑猫」と表記される甲虫の一種です。その名の由来は、巧みにネズミを捕食するネコの狩りに似た俊敏さで、地面をはうアリなどを餌として暮らす行動によるといわれます。

少年時代、夏休みの昼下がり、亀下の祖母の家で、庭先の地面に開いた、アリの巣穴よりも一回り大きな穴に、ニラの細い葉先を出し入れして、草に食い付く黒い小さな虫を釣り上げて「ニラムシ捕った」と、いとこたちと競い合いました。穴の周囲を低く飛ぶハエのような虫がニラムシの親だと、祖母は解説してくれました。それは、コニワハンミョウと呼ばれる、緑色の体に白紋が付いた小型のハンミョウでした。

中学生時代、生物の授業で、日本で一番美しい甲虫として、タマムシと並ぶ虫の名をナミハンミョウだと教えてくださった齊藤卯内先生と出会い、虫捕りの私が誕生しました。先生は標本を手に、太陽光を反射して輝く、熱帯的な青・赤・緑・金色の光沢のあ



村で会いたい「ナミハンミョウ」

茨城県環境アドバイザー
廣瀬 誠

る翅をなでながら「口から突き出ている2本の鋭い刃物のような牙が、生きた獲物をかみ殺すのだ」と話されました。その日からナミハンミョウが私の頭から離れることはなく、亀下の祖母に「本州に広く生息し、ハンミョウ類では大型で、頭から腹の先端まで2センチメートルくらい、世界でも有数の美しい甲虫で、河原や草の少ない裸地に住む」と、手紙を書きました。

生き物好きの祖母は、それならと盂蘭盆の墓参りの午後、久慈川の渡し場から河川敷の小道、石神城址の崖、寺への坂道、小学校の運動場と、私の虫探しの相手を務めてくれました。しかし、目当ての虫は見つからず、坂の上のイモ畑に囲まれた、狭い墓地の入り口にあるエノキの木陰で休むことに。腰を下ろして黒い地面を見た一瞬、虹の輝きが舞い上がりました。祖母が麦わら帽子で、その光の塊を伏せます。笑顔の2人。頭上ではアブラゼミの暑い合唱。祖母の手の中で輝いたハンミョウは、齊藤先生への土産となりました。この夏、まだ村内で美しいハンミョウを見ません。